教科別！

未来につながる授業実践事例

取材・文／永井ミカ（英語・国語）
いのうえりえ（数学・理科・社会）

「学習することは未来の自分をつくること」そんな納得を生む授業はどうしたら可能なのでしょうか。巻頭記事（P8～）で長田氏に示された、教科教育で行うキャリア教育の4つのポイント「学習の内容」「授業の手法」「学習のルール」「体験的な学習」をキーワードに、全国で取り組まれている実践を紹介します。

学習の内容
学んでいることが将来役立つことを、実社会と結びついた題材を使うなど学習の内容で示し、興味関心や意欲を高めている

授業の手法
将来必要になる力を育むための授業の手法をとっている。例：発表などの言語活動によってコミュニケーション能力を育む

学習のルール
社会で必要なルールを、授業でも学習のルールとして教えている。例：締め切りを守ることや、人の話を聞くことの大切さを教える

体験的な学習
教室内外での体験を用意し、社会・生活において学習内容が役に立つことや、身につけるべき力が何かを意識させている

内容　体験

【3学年　時事英語】

異文化間でのプレゼンの実践が社会で役立つ論理的思考力を育てる

山崎秀樹先生　北海道千歳高校（北海道・道立）

英語

どうすれば相手に伝わるかなぜ伝わらないかを考える

普通科、国際流通科、国際教養科から成る北海道千歳高等学校。国際教養科で教える山崎秀樹先生は、ディスカッションやプレゼンを重視する授業を実践している。特に意識しているのは、将来ビジネスシーンで必要になるであろう、わかりやすく説得力のある説明を英語で行うスキル。「どうすれば伝わるか考えることで論理的思考力が養われます」と言う。

英語でのプレゼンの相手はネイティブがベスト。昨年度は3年生の時事英語の授業で、年間15回、オーストラリアの高校生とテレビ会議システムでつながった。「文化的背景や価値観が違う相手に何かを説明するのはとても勉強になる」と山崎先生。「お互いの文化や生活について話すにしても、ただ日本語を英語に翻訳するだけでは伝わらないことも。異文化理解ができていなければ、英語力があっても失礼なことを言ってしまったり、意味が伝わらなかったり。そこで生徒たちは試行錯誤するわけです」。

考え話すことで総合的英語力がアップ

プレゼンは4人1組で行う。テーマに沿って最初はグループ内で一人ひとりがプレゼンするなど、小さな発表を繰り返すことで慣れていく。内容をグループ内で練る際は、教材としてニュースビデオや新聞記事なども活用。この作業で生徒は、自分たちが日本について実はよく知らないことに気づき、「世界の中の日本と自分」について考えるようになるのだという。

相手とつながったら使うのは英語だけ。4人全員がローテーションで話す。「たとえモニターごしでも相手と対面すれば、相手の表情で自分の言いたいことがうまく伝わっていないこともわかります。その悔しさが、次への学習意欲につながります」。

1・2年生で積み重ねてきた日常の文法や単語の学習のうえに、「論理的に書く」「論理的に発表する」という力をつけたことで、山崎先生の教え子は、国際交流や留学の場で物怖じせず意見を表現できるようになってきた。3年間で、各種英語検定や模試の英語の成績も伸びている。「知識習得の確認だけでなく、実際に既習事項を応用することで、実践的な英語力が身についているのだと思います」。

プレゼンのコンテンツ（抜粋）

- 世界共通の話題（政治、経済、文化など）に関して発表・意見交換をする。
- 日本語、日本文化や日本の生活について、はじめて日本文化に触れる相手に教える。
- 日本の観光に焦点を当て、オリンピック東京誘致や北海道への観光誘致の方策、日本のポップカルチャー（アニメや漫画、「カワイイ」文化など）を相手に紹介する。
- OECDの「Better Life Index」で、オーストラリアの「生活のしやすさ」が3年連続首位なのを踏まえ、日本が22位である理由を考えたり、オーストラリアの生徒に生活の実感などを聞いたり議論をする。意見をエッセイにまとめて発表する。

テレビ会議の様子

国語

内容

【1学年　評論文】

内田樹『なぜ私たちは労働するのか』を題材に図書室と連携して考えを深める

清水直樹先生　山本高校（大阪・府立）

司書が選んだ「労働」本をあわせて読む

図書室と教科の連携に力を入れている大阪府立山本高校。清水直樹先生は、教科書掲載の内田樹『なぜ私たちは労働するのか』において、図書室との連携授業を行った。

まず生徒に予習プリントを配布。そのなかで外資系、コンサルタント会社、ジョブ・デスクリプションなどの用語をていねいに解説。その際、ニート、デイトレーダーなどは英語の記述も。清水先生は英語科の教員資格ももっており、「国語の授業であっても、現代用語として知っておいたほうがいい英語はどんどん取り入れる」と言う。

通常の授業のあと、司書が選んだ〝労働〟に関する参考資料を生徒に紹介。清水先生もすべて読み、図書室に特設コーナーを設けてもらった。「興味のある職業について書かれた本のほか、『就活とブラック企業』など問題提起型の本も好評でした」と清水先生。「文理選択や大学進学のことしか考えられなかったけれど、その先のことも考えなくてはならないと思った」「『働く』ということの具体的なイメージを描くことができた」など、生徒が考えを深めていく様子が生徒の感想カードから感じられたそうだ。

参考資料タイトル（抜粋）

『働くって何だ』『いま、働くということ』『「働きたくない」というあなたへ』『仕事ってこういうことだったのか』『就活とブラック企業』『しあわせに働ける社会へ』『デジタルの仕事がしたい』『ギャル農業』『父の仕事を継ぐ　自分の味をつくる』『動物とふれあう仕事がしたい』『子どもにかかわる仕事』『介護・福祉の仕事がわかる本』『ディズニー　そうじの神様が教えてくれたこと』『仕事が夢と感動であふれる5つの物語』『「やりたい仕事」病』『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか？』『過労死のない社会を』『自分に適した仕事がないと思ったら読む本』

国語

手法　ルール

【1学年　漢文】

格言を使った寸劇をグループで演じ話し合って解決していく力をつける

南﨑徳彦先生　横浜隼人高校（神奈川・私立）

身近な生活に結びつけるシナリオづくり

「漢文が嫌いだと言う生徒は7割。1年生の最初で何とか漢文に親しみを感じてほしいと考えたのがきっかけです」と南﨑徳彦先生。日本人の考えに深く影響を与えている漢文について、生徒が少しでも興味や関心をもてるように、グループで寸劇を創り演じる授業を実践している。

まず、教科書掲載の「有備無患（備へ有れば患ひ無し）」「少年易老学難成（少年老い易く学成り難し）」など10編の格言の内容をつかみ、生徒一人ひとりが2編ずつ選んでシナリオをつくる。次に4～5人のグループ内で発表し、代表作品を選んでグループでシナリオを練り直す。配役を決めて練習して発表。振り返りシートで学んだこと、気づきをまとめる。寸劇を行う側のルールは、今の生活と結びつくような「オチ」をつけること、聞く側のルールは、発言を気持ちよく受け止めること。「安心してグループ学習や発表ができる場づくり」には配慮している。

この授業で身につけさせたいのは、漢文を正しく書き下す力や、漢字の意味に注意して現代語訳する力、そして、新しい仲間と話し合って協創する力。南﨑先生は、ひとり学習→グループ学習→ひとり学習、という流れを現代文や古文などの授業でも取り入れており、「みんなで話し合って解決する」という社会で必要な力を身につけさせる言語活動を意識的に取り入れているそうだ。

授業後の生徒の感想は「楽しく興味が持てた」「もっと漢文を読みたい」「漢文のルールが理解できた」など前向き。「漢文入門としてはこれで成功。これから学びを深めるきっかけにしてほしい」（南﨑先生）。

手法

【1学年　数学Ⅰ　2次関数】

自分で解く醍醐味を実感し社会で自ら行動できる人に

三原直也先生　関東第一高校（東京・私立）

数学

モヤモヤする授業でわからないおもしろさを

「僕の授業は、生徒をモヤモヤさせることに始まり、すっきりしないまま終わるのが特徴です」と三原直也先生。

例えば、2次関数。一つの数式を黒板に示してこの式の意味は何だろうと問い、グループで考える。

「生徒はあれこれ話し合い、式変形はこうなるからと予測し、グラフを描き始めていく。その間、僕は生徒の様子を見てまわり、どのあたりで詰まっているかを把握します」

20分ほど経ち、生徒たちがいい意味で煮詰まってきたところで、つまずきがちなポイントを共有しながら、解説する。生徒全員が納得し、理解したところで、今度は少し視点の異なるパターンの演習問題を提示し、解いてもらう。

「最後までやり切らずに50分授業が終わってしまうので、生徒はすっきりしていないわけです」

黒板もあえて丁寧に書かない。その答えを写し、わかった気になって満足してもらっては困るからだ。

宿題も特に指定せず、生徒自ら関連問題を教科書や参考書から選んで解き、週1回、そのノートを提出するというやり方だ。

脳に汗かく楽しさを知れば、学習は必ず生きる力になる

答えそのものよりも、答えを出すプロセスにこそ意味があるし、そこにおもしろさがある。「一人でできることなら授業はいらない。授業は30人いるからこそできることをやる」というのが三原先生の方針だ。

「だから、生徒自身が考える時間を多く取ります。しかも僕はヒントを時折言うだけ。生徒は脳に汗をひたすらかきながら、問題を一つずつクリアしていきます」

既知の事柄を使いながら、新たな概念の理解に取り組むには飛躍が必要だ。上手にヒントを示せば、生徒は飛躍することができるし、次から自力でジャンプすることができるかもしれない。成長の実感は「未来は自分でつかみとれる、未来っておもしろい！」という生きることへの前向きさにもつながると考えている。

いざ社会へ出ると、答えのないものを追求する機会のほうが断然多い。

「言われたことしかやらないのではなく、むしろ言われなくても余計なことをしてしまうような人に育ってほしい。そのためにも〝何だかよくわからないけれど、わからないことを考えるのってワクワクして楽しい〟。そういう感覚を身につけてほしいと思い、考えさせるスタイルの授業に徹しています」

同じ学年で担任をもつ、川合智先生曰く「三原先生の授業の後のSHRは正直やりにくい（笑）。生徒同士で数学の問題をいつまでも話し合っているので。その熱気の中に入り込むのが難しいんです」

三原先生の授業を「わかりやすい」という生徒はいないが、授業中はみんなにこにこしている。課外講習は常に受講者で満杯だそうだ。

■三原先生の授業の流れ

2次関数の場合

約20分	数式①　基本の提示 $2X^2-4X+5$ 式の意味を考えようと呼びかけ	生徒は中学までに習った知識を使って、グループで手を動かしながら話し合う。 先生は教室を回りながら様子を観察し、いいアイデアを教室で共有したり、ヒントを出す
約 5分	最小値の変化の概念の解説	デジタル教科書を使い、式変形によりグラフがどう動くかを見せながら理解を促す
約15分	数式②　応用問題	最初に解いた問題よりも難しく、かつパターンの異なる問題を再びグループで考える。 解は示さずに授業終了
	問題を指定しない宿題を出す	生徒は自分で必要だと思う問題を選んで挑戦する。復習として基本的な問題を解く、つまずいた問題を解く、発展課題に挑戦するなど自由

	定期テスト	簡単ではないが、過程点をつけられる問題を出し、解に至る過程を丁寧に採点する

■先生の個人サイト「三原塾」

授業や教科書での理解が不十分な生徒がくり返し学べるように「三原塾」という個人サイトを公開。どんな風に考えていけばいいのかがわかる動画解説も掲載。http://miharalab.web.fc2.com/

理科

体験 内容

【2学年 生物基礎】

「暗記」ではなく「理解」を目指す教養としての生物

塩瀬 治先生 獨協高校（東京・私立）

野外学習の体験で社会貢献力を磨く

獨協高校では、とりわけ環境教育に力を入れている。その先頭に立ち、ビオトープや屋上緑化、学校の周囲に植樹する「獨協の森プロジェクト」といった活動を指導しているのが、生物の塩瀬治先生。

「植物などに直接触れ、活動に取り組むことは、循環する生態系を知るだけでなく、多様性を認める力、社会に貢献できる力を育てることにつながる。だからこそ、野外で自然に触れる学習を、もっと増やしていきたいと考えています」

エイズや病気など身近な話題で興味を喚起

そんな塩瀬先生が、日々の授業において大事にしているのは「生物を教養として学ぶ」こと。

「生物には自分や家族、世の中を理解するために必要な知識が、いっぱい詰まっています。教養として身につけておけば、実生活で役に立つことが多いし、世の中と自分がどうかかわっていくのか、生きていくうえで大切にすべきことは何かといったことを考える際、役立ちますから」

授業は、基本的に教科書に沿って進めるものの、適宜、身近な話題を取り上げ、興味喚起を心がけている。

例えば、免疫の授業では、HIV感染症やアレルギーなど、病気にからめて、免疫の説明を行う。

「HIVウイルスが怖いのは、重要な免疫細胞を破壊してしまい、免疫機能を完全に奪ってしまうことなんだと説明し、HIV患者の写真を見せます。すると〝エイズになるとどんな症状になるのか？〟〝日本の患者は？〟〝キスでも感染するの？〟などといった質問が、矢継ぎ早に飛んできます」

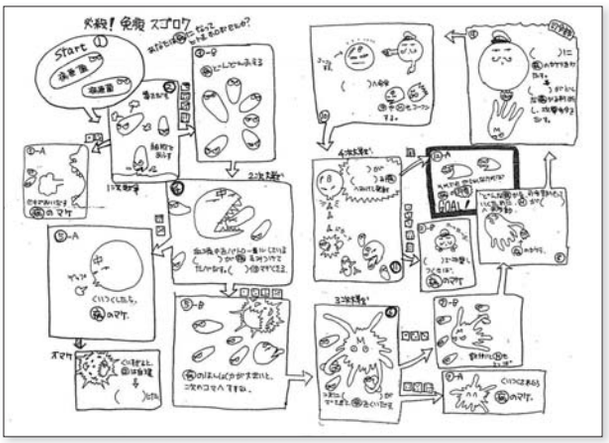
塩瀬先生はそういう時、すぐに答えを言わず、「なかなか鋭いねえ」と褒めたり、「どうだと思う？」と逆質問したりするようにしている。「自分で考える時間を与えることで、より理解は深まる」からだ。

生徒たちの関心が高まったところで塩瀬先生はオリジナルの教材を配布する。図1の「必殺！免疫スゴロク」もその一つ。免疫と病の関係が、ゲーム感覚で学べるようになっている。

「このスゴロクを見せると、たいてい最初に〝何だ、これは!?〟というリアクションが出ます。そこでいったん免疫の働きを説明し、その後、スゴロクをやってもらう。ゲーム感覚で楽しみながら理解の定着、確認を図っていくわけです」

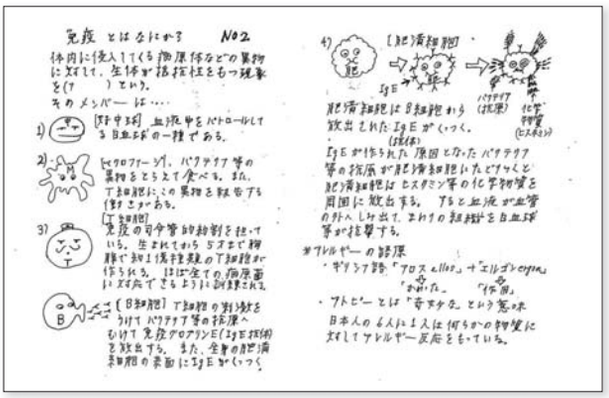
自分とつながりのないところで難しいことを理解しようとしてもすぐに忘れる。生徒の意識が「覚えよう」から「理解しよう」に変わった時「そこから本当の意味で、社会で役立つ知識。力が身についていくのだと思います」。

■図1 「必殺！免疫スゴロク」 ダウンロード可



塩瀬先生が前任校の同僚と作成した「必殺！免疫スゴロク」。イラストが生徒の好奇心を高め、夢中になって取り組んでくれるそう。

■図2 「免疫（アレルギーとは）」



「免疫（アレルギーとは）」を説明した教材。最初にまず生徒に考えさせ、答えを書いてもらい、その後にアレルギーのしくみを説明していく順番で、授業は構成されている。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：キャリアガイダンス.net >> 発行メディアのご紹介 >> キャリアガイダンス（Vol.402）

【1〜3学年　日本史】

社会

手法

「問い」を与えて「考えさせる」。歴史がモノの見方のヒントになる

三浦隆志先生　玉島商業高校（岡山・県立）

■授業中の生徒たちの様子

何を教えるかではなく、何を考えさせるかを重視する

日本史と言えば、どうしても暗記科目というイメージが色濃い。しかし、三浦隆志先生は「覚えた量で評価するのはもはやナンセンス。知識をベースにしながらも、人の生き方や、なぜ昔の人はそんなことをしたのかと、問題意識をもって歴史の本質と向き合わせたい。いろんな人の営みがあって今の自分たちがいるのだと実感できるし、考える力を身につけることができる。それが日本史という学問です」と語る。実践の重要なカギは教師から生徒への「問い」だと言う。

「例えば、近現代では満州事変が起こった前後、青年将校たちによるテロが相次ぎ、その一つとして五・一五事件があって犬養毅が殺されてしまいます。こうした史実を把握したうえで、そもそもなぜ当時は青年将校によるテロが起こったのかという『問い』を投げかけてみるわけです」

教科書の内容だけで生徒が考察するのが難しい場合、背景理解を促すプリントを配る。それをもとに4人ずつのグループに分かれ、4、5分間、考えてもらうようにしている。

「考えは100から200字程度にして、グループごとに板書するなどして、意見を共有します。それら一つひとつの解答に対して〝この着眼点はいい〟〝これが一般的に言われている考えに近い〟など肯定的に評価していきます。授業の半分くらいはこのような活動にあてることで、生徒は考えることを習慣化していくと思っています」

大学の授業は参考文献を読んだうえで議論するスタイルに変わりつつあり、勉強＝覚えることという感覚で大学に行くとついていけない。気になったことは自分で調べる、自分で勉強できる人を育てたい。これはキャリアを拓く力にもつながるという考えだ。

昔の人のメッセージで創造力を育てる

三浦先生は「日本史には昔の人のメッセージが詰まっている」と言う。

「『洛中洛外図』という京都の景観や風俗を描いた屏風絵があります。これも、大きなタワーもない時代に、なぜこのような俯瞰図を描けたのかと考えると不思議ですよね。『見返り美人図』だってなぜ見返っているのか。そう考えることでモノの見方がグンと広がります。正解はないと思いますが、考えることは楽しいと昔の人が教えてくれている、そんな科目だと私は思っています」

教材としてよく活用したのは、東大の入試問題。「知識の量ではなく読解力や考察力、因果関係をみつけたり、類推する力を養う良問です。取り組むことで考える力もつくし、普遍的な知識も身につきます」

■東大の入試問題をもとに作った補助プリント　ダウンロード可

補助プリント

次の(1)〜(5)の文章を読んで、南北朝内乱に関する下記の設問A・Bに答えなさい。

(1)　南北朝内乱の渦中のこと、常陸国のある武士は、四男にあてて次のような譲状をしたため、その所領を譲った。
長男は男子のないまま、すでに他界し、二男は親の命に背いて敵方に加わり、三男はどちらにも加担しないで引きこもってしまった。四男のおまえだけは、味方に属して活躍しているので、所領を譲り渡すことにした。

(2)　1346 年，室町幕府は山賊や海賊，所領争いにおける実力行使などの暴力行為を守護に取り締らせる一方，守護請や兵糧米と号して，守護が荘園や公領を侵略することを禁じた。

(3)　1363 年のこと，足利基氏（注１）と芳賀高貞（注２）との合戦が武蔵国で行われた。高貞は敵陣にいる武蔵国や上野国の中小の武士たちを見ながら，次のように語って味方を励ましたという。
あの者どもは，今は敵方に属しているが，われわれの戦いぶりによっては，味方に加わってくれるだろう。

(4)　1373 年，九州五島の武士たちが「一味同心」を誓った誓約書に，「このメンバーの中で訴訟が起きたときは，当事者との関係が兄弟・叔父甥・縁者・他人などのいずれであるかにかかわりなく，理非の審理を尽すべきである」と書かれている。

(5)　1400 年，信濃の国人たちは，入国した守護に対して激しく低抗してついに合戦となり，翌年，幕府は京都に逃げ帰っていた守護をやめさせた。

注１）足利基氏：当時、鎌倉公方であった。
注２）芳賀高貞：1362 年９月、関東管領に上杉房顕が就任するなかで、鎌倉公方の足利基氏が宇都宮氏綱が有していた越後の守護職を奪って上杉房顕に与えた。氏綱の守護代として越後国に入部していた芳賀高貞と高家は、この処置に激怒し、越後国内で上杉軍と戦ったが完敗した。

設問
南北朝期の地方社会における国人について明らかにし、守護の入部に対して国人らはどのように対応したかを説明しなさい。

ダウンロード可　※ダウンロードサイト：キャリアガイダンス.net >> 発行メディアのご紹介 >> キャリアガイダンス（Vol.402）